

自閉スペクトラム症(ASD)の対人関係の問題について、どのように理解して対応したらいいの？

Standard!

- ASDは先天性の脳の機能発達の偏りによって、日常生活や社会生活に支障をきたしている。
- 3つ組の特性自体が問題かどうかではなく、社会との関係性において生きづらさを抱える。
- ASDの特性を理解し、自尊心を低下させない支援が、二次障害の予防につながる。

自閉スペクトラム症(ASD)は、脳の認知機能の偏りによって起こる発達障害の1つであり、おもな特徴として、「対人関係やコミュニケーションに難しさを感じる」「特定のものへ強いこだわりをもつ」「感覚と運動に偏りがある」などが挙げられる。

ASDは一般的に先天性の脳機能障害であるとされているが、原因が特定されている障害ではなく、親の育て方や当事者個人の性格の問題などで生じるものでもない。ASDの特性の現れ方は個人差が大きいため、社会生活にそれほど支障をきたさない場合もあれば、深刻な問題を生じさせることもあり、社会的障壁(環境・制度・慣行・観念など)によって適応が左右されることも少なくない。

ASDの3つ組と感覚過敏(または鈍麻)という特性の理解

ASDを理解するための概念としてイギリスの精神科医ローナ・ウィングは、「自閉症の3つ組

と「感覚過敏または鈍麻」の4つを特性として定義している。これらの特性は、必ずしも障害となるわけではなく、個人のおかれている環境に適応すれば、強みや長所になることもある。

1. 社会性の特性

社会に広く通用するマナーや生活環境のなかで要求される暗黙の了解などといったルールに気づきにくい、または無頓着な特性があることをいう(表1)。周囲の意見や考えに流されにくい、感情的に巻き込まれにくく、人の反応を気にせず自分のやりたいことに没頭することができるといった長所になることもある。

一方で、他者と良好な関係を築くためには、相手の気持ちを汲み取り、自分の発言や行動が相手にどのように受け取られているかを想像して接するスキルが必要になる。ASDは、このようなスキルを身につけることに困難を抱えているため、相手の立場を考慮していないように受け取られ、人間関係がギクシャクしてしまうことがある。

自閉スペクトラム症(ASD)の対人関係の問題について、どのように理解して対応したらいいの？

精神症状の背景にある身体疾患を見逃さないためには、どうしたらいい？

Standard!

- 精神症状を精神疾患固有と捉えず、中枢神経系の障害や代謝異常等による脳機能障害の可能性を考慮し、バイタルサイン等の身体的指標を含めて患者の状態を多角的に評価する。
- 日常の観察に基づく「いつもと違う」という主観的な違和感を、共通言語を用いて客観的情報へ整理し、チームで共有して迅速な精密検査や受診につなげる。

なぜ身体疾患が精神症状を呈するのか

臨床現場において、興奮・不穏・幻覚・妄想・抑うつ等といった精神症状は精神疾患に特有のものとして捉えられがちである。しかし実際には、これらの症状は中枢神経系の器質的障害や全身状態の変化によっても生じ得るものであり、必ずしも精神疾患に固有のものではない。看護を行うにあたっては精神症状自体を特定するのではなく、患者の状態像を多角的に捉え評価することが重要となる。

身体疾患によって精神症状が現れる背景には、脳機能への直接的あるいは間接的な影響が存在する。例えば、髄膜炎や脳炎などでは、細菌やウイルスの感染によって炎症を起こし、意識障害や行動異常を引き起こす。また、低血糖や電解質異常、甲状腺機能異常といった代謝・内分泌疾患では、神経伝達のバランスを崩し、錯乱や抑うつ様症状を呈する。薬剤の副作用や離脱症状、中毒なども精神症状として現れることがある。これらはいずれも、脳の機能障害として理解されるべき現象である。特に発熱や感染を

きっかけに体の免疫システムが過剰に反応して脳に炎症を生じさせる場合などは、認知機能の低下や意識障害だけでなく、双極症に現れるような感情の障害や統合失調症などに見られる思考障害を伴うことも少なくない。

臨床で見逃されやすい理由

精神科領域において身体疾患が見逃される要因としては、いくつかのことが考えられる。まず、すでに精神疾患の診断を受けている患者では、新たな症状が既存の精神疾患の現れと解釈されやすく、認知バイアスが働きやすいことが挙げられる。特に慢性期や長期入院患者においては、その症状が日頃の精神症状の延長線上であると誤認しやすく、患者の精神症状自体に変化があっても見過ごされやすい傾向がある。

次に、精神疾患患者は、痛みや体の不快感に対する感受性が低下していることもあり、強い痛みを生じている状況であっても患者の訴えによって発見するのが困難ことがある。また、ある身体疾患における典型的な症状を生じさせていても、その症状に気づきにくいことがある。